

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 1 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520359

研究課題名(和文)新約聖書偽名書簡についての文学的研究：擬似パウロ書簡を中心に

研究課題名(英文)A literary study on the pseudo-Pauline epistles in the New Testament

研究代表者

辻学(Tsuji, Manabu)

広島大学・総合科学研究科・教授

研究者番号：50299046

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、新約聖書に含まれている擬似パウロ書簡(コロサイ、エフェソ、第二テサロニケ、第一テモテ、第二テモテ、テトス各書簡)を対象とするもので、偽名書簡がもつ文学史的背景を考察すると共に、これらの偽作書簡が、パウロが亡くなった後の時代に、パウロ自身が書いた書簡の内容の「正しい理解」を示し、異なるパウロ理解を退ける目的で記されたものであることを示すものである。これらの書簡の存在は、パウロ思想に対する理解が、パウロ後の時代において一様ではなく、さまざまな受容の仕方があったことを証言している。

研究成果の概要(英文)：This research is on pseudo-Pauline epistles in the New Testament (Colossians, Ephesians, II Thessalonians, I & II Timothy and Titus). Treated matters are: literary-historical background of pseudonym letters in ancient times, how to judge the authenticity of each epistle, and purpose of each pseudo-Pauline epistles. I reached the conclusion that these pseudo-Pauline epistles have intention to propose "the correct interpretation of Pauline teaching" in the time after Paul's death and to exclude other "wrong" interpretations. These epistles are witnesses of the situation where various interpretations of Paul's teaching existed after his death.

研究分野：新約聖書学

キーワード：新約聖書 偽名書簡 パウロ書簡 パウロ受容史

1. 研究開始当初の背景

新約聖書の中には、パウロやペトロ、イエスの弟ヤコブやユダなど、1世紀キリスト教の指導者によって書かれた体裁をとってはいるが、真筆ではない偽名書簡が多く含まれる。これら偽名書簡に関する研究は、欧米の状況に比べると日本では従来きわめて貧弱であった。また、新約聖書中の偽名書簡をひとつの文学的現象として取り上げ、文学的伝統や歴史的状況とのかかわりから総合的に捉える研究は、欧米の新約聖書学でもまだ端緒に着いたばかりである。そこで、日本におけるこの分野の新約聖書研究の遅れを埋めつつ、国際的な学的貢献をも図る研究が必要となっていた。

我々はすでに、擬似パウロ書簡のうち・テモテ書簡およびテトス書簡について、その偽作手法についての研究を進めてきた。そこで本研究では、その成果を擬似パウロ書簡さらに新約偽名書簡全体に広げて適用し、偽名書簡が1世紀後半から2世紀前半の初期キリスト教に集中して現れた事態を解明することにした。

2. 研究の目的

本研究は、上記新約偽名書簡、とりわけ擬似パウロ書簡をまとめて取り上げ、新約偽名書簡が初期キリスト教史の中で集中的に現れた要因およびその偽作手法を、ギリシア・ヘレニズム文学、またキリスト教の母体であるユダヤ教文学の伝統の中で、また初期キリスト教の置かれた歴史的状況の中で捉えようと試みるものである。

ただし新約偽名書簡は10通あり、分析には非常に多くの時間を必要とするので、本研究期間内においてはそのうち擬似パウロ書簡である6通のみを対象とした。本研究の目的は、(1) ギリシア・ローマ世界および古代ユダヤ教における偽名文書の背景との関連、(2) 各書簡の著者たちが、真正パウロ書簡とのつながりをどのように利用して書簡を偽作したか、その手法の問題、そして(3) 各書簡は初期キリスト教史のどのような状況にどう働きかけようとしたのかという歴史的状況を明らかにすることであった。

3. 研究の方法

上記2の目的を達するために、個々の擬似パウロ書簡を分析する作業が研究の中心となるが、分析に際しては、実際の著者および著者が想定している読者が、架空の著者であるパウロについて、また偽名文書というものについてどのような知識を有していたかを明らかにすることが重要であった。そこで本研究ではとくに、キリスト教外の文学研究でも近年広く知られるようになっていく「間テクスト性」(Intertextuality)の観点を新約聖書分析に適用した。この手法を我々はすでに・テモテ書簡およびテトス書簡の分析に用いたことがあり、擬似パウロ書簡に対する

真正パウロ書簡の影響を狭く判断しすぎていた従来の研究傾向を修正するのに有効であることを確認できていたからである。この方法を用いて本研究では、擬似パウロ書簡各書と真正パウロ書簡との依存関係のみならず、擬似パウロ書簡相互の依存関係についてもより立ち入って考察することが可能となった。

4. 研究成果

(1) 本研究においてはまず、古代ギリシア・ローマ世界および古代ユダヤ教の文学における偽名文書の背景にさかのぼって、偽名書簡に対する評価および文学的機能を検討した。その結果、古代においては著作権という概念が存在せず、偽作に対する抵抗感が現代よりもずっと少なかったという、新約聖書研究の中で従来見られた通説は誤っていることが明らかとなった。偽作に対しては否定的評価がなされていたのであり、それに応じて、偽作であることが露呈しないための技術も発達しており、また真贋批判の方法も存在した。新約偽名書簡もそのような文学的評価を背景として偽作されているのであり、したがって、擬似パウロ書簡は偽作であることがわかっていながらも「パウロ書簡」として受容されたのだという「護教的」説明は正しくない。擬似パウロ書簡の作者たちは、もちろん程度に差はあるが偽作であることが露呈しないための技術を駆使している。その際とくに重視されたのは、その文書が執筆された事情が、「本物」として不自然にならないようにということであった。成立事情の不自然さは、文書が偽物だという疑いを招くことになったからである。擬似パウロ書簡の著者たちはそのために、期せずして共通した手法に訴えている。それは、曖昧な執筆状況設定を行うということであった。

(2) 擬似パウロ書簡各書の分析にあたっては、まず偽名文書であるかどうかの文献学的判断を行なった。いずれの文書についても、偽名書簡ではなく真正パウロ書簡だという主張が(主として北米の研究者によって)現在に至るまでなされているからである。その結果、研究対象として選んでいる6通はいずれも偽作であると見なして間違いのないという結論に達した。この種の判断に際しては、主要な神学用語使用の有無や、思想的相違が基準とされることが従来は多かったのだが、本研究においては、むしろ文体や語彙の癖の有無を重視した。それらは執筆状況や執筆年代の相違に影響されて変わることが少ない要素だからである。

(3) 研究目的の(2)で述べた、真正パウロ書簡とのつながりの問題に関しては、擬似パウロ書簡の著者たちは、従来の想定よりも数多くの真正パウロ書簡を知っており、自分の論述の中に織り込んで「パウロらしさ」を演出するのに用いていることが明らかとなった。このことはとりわけ、コロサイ書簡、エフェ

ソ書簡、そして・テモテ書簡とテトス書簡に当てはまる。その目的は主として、真正パウロ書簡を想起させる語彙や表現を用いることで、手紙の真筆性を印象付けることにある。真正書簡に登場する人名を流用するのも同じ動機によるものと見なす。また、コロサイ書簡が非常に多くの真正パウロ書簡を踏まえて書かれていることからして、従来非常に早い執筆時期が想定されていた(パウロの生前に書かれたという意見すらある)この書簡が実際には、真正パウロ書簡が収集され始めた、1世紀後半の比較的遅い時期に創作された可能性も十分考えられることを本研究では示すことができた。

(4) 擬似パウロ書簡が創作された動機を本研究では、「修正パウロ主義」というキーワードの下にまとめている。すなわち擬似パウロ書簡はいずれも、さまざまなパウロ理解が登場していたパウロ死後の状況下において、自分たちのそれとは異なるパウロ理解を否定しつつ自分たちの理解を「正しいパウロ思想」として位置づけようとしたのである。しかしそれは、パウロ自身が真正書簡の中で述べたしばしば曖昧かつ相互に矛盾していることもあるさまざまな言辞の一部を、自分の置かれた状況の中で活かすように修正ないし再解釈することによって生まれたものであり、それは時として、パウロ自身の主張内容に対する明瞭な否定さえも含みうるものであった(例、テサロニケ書簡)。したがって、従来繰り返し主張されてきたように、擬似パウロ書簡をパウロ思想の「継承」と見なすことには大きな留保がつけられる。これが本研究のもっとも大きな成果かつテーマといえる。擬似パウロ書簡の思想は、真正パウロ書簡の「継承」というよりも、「修正再解釈」だと言った方が当を得ているのである。

本研究は、擬似パウロ書簡の執筆動機が、パウロ受容の多様性を背景としていることを明らかにした。すなわち、パウロ思想は、上述したパウロ自身の曖昧さや矛盾に応じて、さまざまな受容のされ方をすることになったのだが、擬似パウロ書簡はその中の、保守的な傾向を反映した文書集ということが出来る。教会内においても家庭内においても、女性が男性に服従するよう命ずる倫理観はその典型的なものだが、それは同時に、女性が自律的かつ指導的な活動を教会内で展開するようになった事実をも間接的に証言しており、そのようなパウロ受容も1世紀後半から2世紀前半にかけてのキリスト教内に存在したことを示している。

(5) 以上の成果は、下記の学術論文において公開したほか、単行本の形でも公にしている。日本においては、擬似パウロ書簡をまとめて考察するという研究書がこれまで存在しなかったこともあり、新約聖書研究のこの分野に対する注目を増すことができた。また、従来は福音書(イエス)と真正パウロ書簡に非

常に偏っていた日本の新約聖書研究に、広がりを与えることができたといえよう。それは同時に、初期キリスト教史および思想史を考察する上で、幅広い文書を視野に入れることにもつながり、その点でも研究史に寄与することになったと考えている。

日本では、新約偽名書簡についての研究がほとんど進んでいなかったという現況に鑑みて、本研究の成果は努めて一般読者にも理解可能な形で公開した。一般読者の目にも触れやすい雑誌への連載や、より読みやすい形での単行本出版を行なったのはそのためである。その結果、「偽名」文書がキリスト教の教典たる新約聖書の中に含まれているということへの違和感や抵抗感を減じることにつながったと考えられる。

本研究では、新約偽名書簡10通のうちの擬似パウロ書簡6通のみに研究を限ったので、今回取り扱うことができなかったその他の新約偽名書簡(擬似ヤコブ書簡、擬似ユダ書簡、擬似ペトロ書簡2通)にも研究対象を拡大し、パウロ以外の名前が偽名書簡に用いられた理由を考察していくことで、新約偽名書簡研究を全体としてまとめていくのが今後の課題となるであろう。また、新約聖書には収められなかった初期キリスト教文書の中にも偽名文書が存在する。本研究ではそれらに視野を広げていくことが叶わなかったので、初期キリスト教および2世紀後半以降の古代キリスト教全体の中で偽名文書がどのように作成され、受容されていったのかを跡付けていく作業も必要になってこよう。とくに、新約聖書が「正典」すなわち正統信仰の基準として受け止められていく過程の中で、「偽作」という(それ自体非難されていた)行為がなぜ頻繁に見られたのかという問題は、キリスト教思想史にとっても重要な視点を提供するはずである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計 5件)

1. Manabu Tsuji, "Replacement or Supplement? On the Purpose of II Thessalonians," *Annual of Japanese Biblical Institute*, 査読有, No. 50, 2015, pp. 49-63.
2. 辻 学, 「ヤコブ書におけるイエス伝承の機能」, 日本聖書学研究所編『聖書の宗教とその周辺: 佐藤研教授・月本昭男教授・守屋彰夫教授献呈論文集』(聖書学論集46) 査読有、リトン社、2014年、531-550頁。
3. Manabu Tsuji, "II Tim 1:6: Laying on of Hands by Paul for Ordination?," *Annual of Japanese Biblical Institute*, 査読有, No. 39, 2014, pp. 65-76. (公開

URL:

http://home.hiroshima-u.ac.jp/tsujim/II_Tim1,6_Laying_on_of_Hands_by_Paul_for_Ordination.pdf)

4. 辻学、「第二パウロと真正パウロ 新共同訳における対応箇所翻訳問題」、『神学研究』、査読無、61号、2014年、65-77頁。(公開URL: <http://kgur.kwansei.ac.jp/dspace/bitstream/10236/11934/1/61-6.pdf>)
5. 辻学「パウロなき後のキリスト教 第二パウロ書簡の謎」、『福音と世界』2012年4月号～2013年3月号(計12回)、査読無、毎号6頁。

〔学会発表〕(計 1件)

1. 辻学「排除か？共棲か？——第2テサロニケ書の執筆意図をめぐって——」、『日本新約学会第54回学術大会、2014年9月12-13日、於：広島女学院大学。

〔図書〕(計 1件)

1. 辻学、新教出版社、『偽名書簡の謎を解く パウロなき後のキリスト教』、2013年、235頁。

〔その他〕

ホームページ等

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tsujim/>

(上記URLにて研究成果を公開)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

辻学 (TSUJI MANABU)

広島大学・大学院総合科学研究科・教授

研究者番号：50299046